

特 60

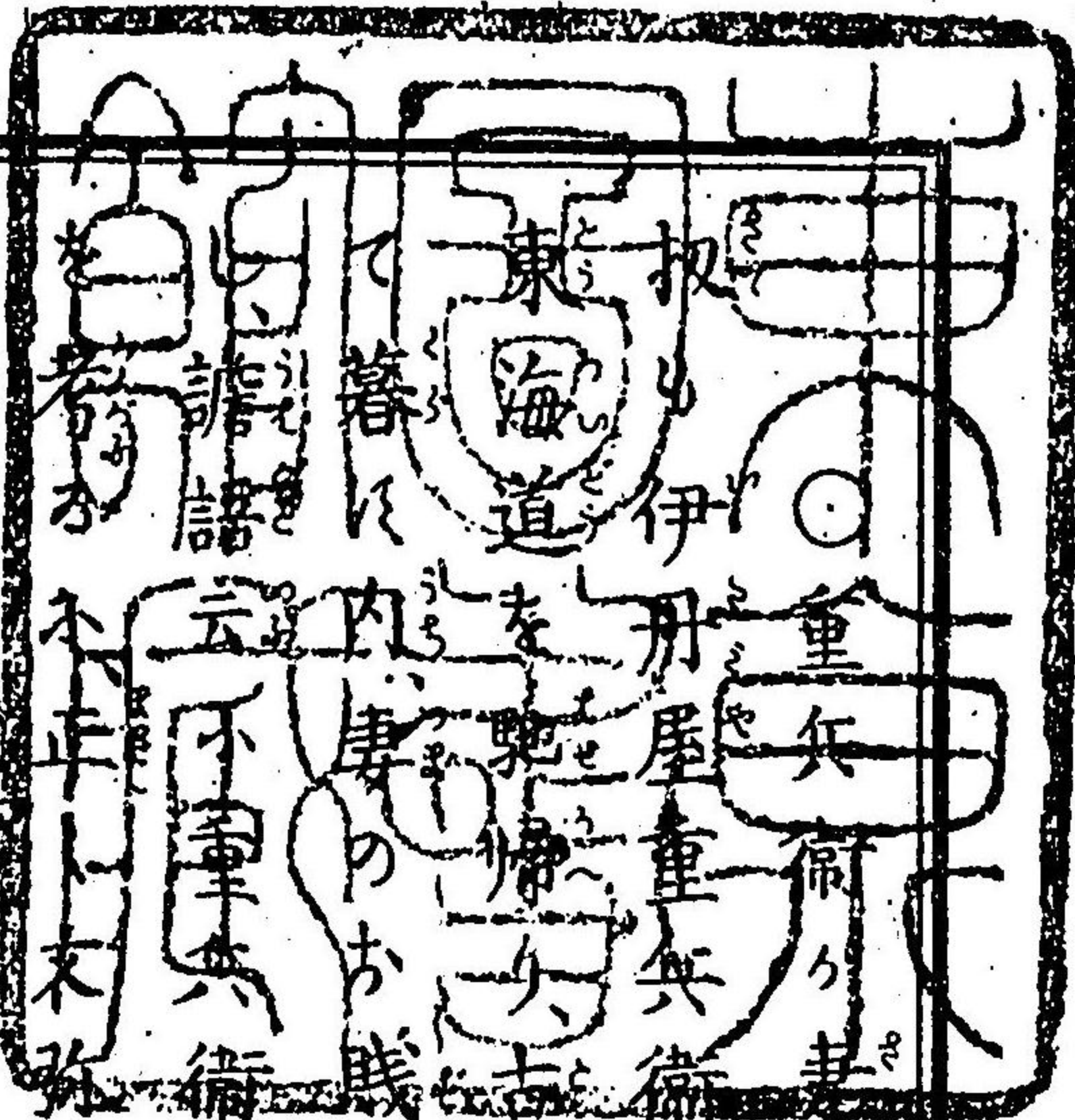
140

文  
弥

宇都谷峠峯北夜嵐

後編





東海道 伊丹屋重兵衛 奇病小嬰  
 文弥の官金奪ひ取り急ぎ  
 主の難を忽ち救ひ、商業を励  
 奇病不て、大熱燃る如く発  
 種々不心を苦めつ、倩容子  
 怨霊と思へど誰も知らざ  
 れバ折々念佛唱ふれ共深たる結ハ浅たう不洗  
 ふともまと其旧の白き色不ハ成難き譬へも愚  
 心りう、己とひとさぐ、醜酒の濁れる胸不酔迷ふ、夫  
 許うハ又一つ、心苦の倍し弟の彦三とあんいへ



奇病小嬰



る者某の町ある、杖木商業白木屋方へ幼より、  
釋奉公主人大切と、勤けるより頼しく終ふハ養  
子小いたさんと、主人親属も相談し、やがてこと  
をたたさんと、たのしむりひもななく、不図此  
ごろハ深川の佐の松といふ藝妓家の抱の小菊  
小かれ、深て、初ハ坐奥の二回三回、今でハ引小引  
れぬ程深く成たる所より、主人の家も不首尾と  
あり、兄重兵衛小引渡され如何なる故り大恩の  
主家へ對し、今回の趣義包ひ語と重兵衛が膝衝  
寄て詰問バ、彦三頭を寝掻藝妓小菊小図ひも思

ひ念れ下紐の解し心の寝物語小、其女の弟が行  
未知ぬを苦小病で、力不成てと頼る、義理と情  
小絆れしハ、如何ある因果の悪縁と、涕かぐら小  
語を聞重兵衛何やら氣不懸り、其弟ハ何國の何  
者と、聞小所も同じ芝金杉の裏通り小て、文弥と  
いへる盲目あるが、官位を取せん為小身を百兩  
小賣其金を持せて京へ上せしが、今小風の便も  
あ、踪跡の知ぬ哀き嘶と、いと小憐小物語れバ、  
扱ハと愕く重兵衛が聞バ、弥倍胸小針、有撃剛氣  
の重兵衛あれバ、弁バ又惘然の緯小あれ、然バ是



非かき訳かれど、何の因果で其女と云んとせし  
が今此で、文弥を殺せし事知なば、妻の病氣も心  
元かしと沈吟たる折ウラハ、次の卧房ハ妻ハ賤  
発熱熾ハ苦て、七轉八倒二人ハ慌て、众保しつ、  
重兵衛ハ、藥煎じて持来といふハ彦三、ろえ  
て、即厨へ走行漸くハ賤ハ人事省ハ重兵衛勦て、  
容子を聞バ毎夜ハ、ハつ時ころとハばしきハ大  
熱発し苦き折枕の辺リハ血鏡の、若き盲人ガ現  
れて、夫重兵衛ハ怨のあれど、有撃剛氣ハ崇れハ、  
因て汝ハ崇るハ、取殺さでや置べきぞと、鋭き

眼ハ怨の顔畏懼ハなる形勢ハ、飛欠ると見て  
即ハ不省と成て跡知らバ毎夜の事ハ身も勞れ  
今ハ苦悶ハ耐ウラバ、抑尚如何なることウハと、  
泣つ怖れつ膝ハ伏哭ハ重兵衛嘆息し、扱ハと弥  
驚きて、現九月廿日の夜ハ、つ時ころウ宇都の谷  
で殺し時の形勢と、妻の苦叫ハ容子ハなじまハ  
たを見小つけ、不覺ハ惘然の弥倍て、口ハ言ねど  
心裡念佛唱ふる折柄ハ、弟彦三藥持て、ハ賤ハ進  
め兄上よ、勞玉ハ今誓時更て看護致ハ、べし彼  
方で休玉ハ、ねと云ど重兵衛文弥ガことを、若し



知れおバ弟迫由かき嘆を掛んと思ひ否決して  
疲ぬぞ和殿ハ店を管理り不都合かき小注意ね  
と云れて諾ひ店へ行跡小な賤ハ志きり小うめ  
き亦肩が悶来て、噫苦やと四苦八劬折うらあん  
まの笛の音お賤が肩を揉せんと呼入卧房へ連  
来る小悪按摩見るも畏懼忌しと屏風廻して夜  
引擔ぎ絶て應もかうりしうバ呼入たるを如何  
せん我肩小ても揉せんと蒲團敷つ、肩小足揉  
せつ浮世の談話最面白く東海道の譚小移り宇  
津の谷の名所ある葛の小路と云緒けるが衝と

搦ミ込むその力ハ盤石小、歴伏うれし如く小て  
悪疼やと重兵衛ハ隻足縮んともるおれど五體  
少も動せば未々此か事ではおい骨ハはね皮ハ  
皮揉で搦で搦殺と云ふ小差者重兵衛も絶入迄  
小仰天し常の按摩と思の外扱ハ文弥で在ける  
うと其顔視バ恐如何小眼ハ恥小頭より胸一面  
小血を灌ぎ身の毛よだちて畏懼く耳を貫く部  
声宇都の谷嶺の恨の一念思ひ知れやと飛らる  
大膽不敵の重兵衛おれバ其怨ハ理おれど古主  
の大事小取し金小菊とやらん姉ありと聞バ必



彼金小利小利を加へ返さん小此以て成佛し  
玉ひねと云バ怨霊齒をむきて取殺さば成佛  
せば怨をれぞと憤怒の顔色消亡べくも見えざ  
りし疾三不審忙く店より来り襖をひうけバ、文  
弥が怨霊虚を打れ外より吹来る風共侶忽然と  
して消失けり、重兵衛漸く安堵して、お賤が病死  
霊の崇り云々と今来し座頭ハ狐狸あるり、そハ  
斯々と繕ひて能小話れハ有撃ハ兄ガ人をころ  
せしとハ心もつうひ疾三ハ驚き怒り然ふても  
罪科おき姉上小崇る死霊の面憎さよ、禳ひ除  
り

て置べきと連小稱名唱へつ、其夜ハ頭小明小  
ける是より毎夜ハつ時頃小文弥の怨霊現れ、  
倍お賤を悩せける罪の報ぞ恐しけれ

○文弥が母伊丹屋へ雇人とある

光陰ハ矢よりも疾く、昨日ハ今日と過ぬれば、日  
脚短き年の暮世ハ何となく忙しく、就中取分賑ふ  
ハ飲食物の家業あり、伊丹屋ガ居酒屋も日頃大  
小繁昌し酒許ハ飯肴舌打鳴て来りあり鼓腹  
帰る酒量客眼を据る客腹立客思ひくの置酒  
小雲より軽き錢賤布泥の如く小酔たるハ鶏上







戸と見え不ける中不交る二人連五分月代小  
杏崩し破羅緒の草履二の腕不環の見ゆるハ底  
知ぬ怪き腕の帯ハ連ハ四三二といふ男伊丹  
屋へ衝と入て心の随不食飲し即其所不酔卧不  
四三二ハ殆持倦し店の小厮不頼つハ己ハ先不  
帰行日も早西へ入相頃此家を差て入来る姫雇  
婦を誘バ小厮ハ奥へ迎入主人不斯と知らされ  
バ重兵衛立出一礼さる不昨日雇婦のハ頼不連  
て参し此姫ハ往古ハ能しき身も今ハ續く不幸  
不零落て今回出る初雇随分健で実貞者良不願

参れと桂庵姫ハ帰行跡不残る雇の姫拙き身も  
只管不御使玉ハれと詞静不述ければ重兵衛惘  
然不思ひつゝ其方不頼ハ我妻が長き病氣不枕  
も揚らば殊不比眼も不自由之の看護而已あり  
と聞て姫ハ頭を擡开ハ便あく思食らん我身も  
盲人の男ありて久く世話を致し故幸ひ馴しと  
あれば御看病こそ参せん重兵衛點頭然あらば  
別て安堵不思ふなり其方も盲人を世話せしと  
住居ハ何所不候ぞ其男の名ハ何と呼れて今ハ  
何方不居らるゝやと訊られ姫ハ漸ひ眼を濕し



住居ハ直金杉ついでに小せて、悴せがれハ文弥ぶんやと申せしが、去年こぞの  
九く月上げつ旬じゆん小せ官位くわんゐを取とり、京きやう都と追まて百兩ひやくりやう持もちて上のりし  
が今いま小せ戻もどつて来きぬらんと、二ふた月つき三さん月つきハ夢かめの裡うち屈かじ指さし  
俟まつ小せ効くちもあらく、早はや二ふた年ねん越こふ占うらやら、靈籤れいせんの數かずも幾いく  
度たびり、心迷こころまよふ生死しせいの分わらぬ緯いとの悲かなさよ、殊こと小せ文弥ぶんや  
が官金くわんきんハ、姉あねのお菊きくが藝者げいしや小せ沈しんみ、苦界くがいの勤つとめの身み  
の價金いしきん便べん小せ思おもふ姉弟あねてい二人ふたり小せ別わかれ其跡そのあとハ、年とし老おい朽くち  
し一人ひとり身みの、五い十じゆ路ぢを踏ふて初はつ旅たびの、雇やと小せ出いでて惜あり  
らぬ身みを存たもて苦勞くろう致いたすも、文弥ぶんやが生死しせい聞きて後のち死ま  
んと思おもふ可たりふて、斯語くわんごり参まりも、涕なみだの種たねの老おいの愚ぐ

痴ち御ご推察すいさつ下くだされと、跡あとハ声こゑさへ忍しのびあり、重兵衛じゆうべゑ聞きて  
驚おどろき悶もえ、一いつ々つ胸むね小せ針刺はりれ、腦のうも貫つらぬく心地こころぢして、廻まえ  
る因いん果くわ小せ其親そのおやが、我家わがやへ雇やと小せ来きと云いふも、悪事あくじの報むく  
遁のぬ責せめ今いま更さら悔くわも何なにりせん、古主こぬしの為ためと氣きを励むし、  
素そ知しぬ顔かほで老おいし身み小せ、浩ある嘆なげの憂うれ苦く勞らう有あ異い轉てん變べん  
の世よとハ云いへ、定さだある身み小せ定さだまらず、息子しよこが踪跡さくし聞き  
んとハ、形かたちあらき緯いとあらん然さふも息子しよこが官金くわんきんを納いれ  
て遣やり、賤布せんぷとハ、何なに云い物ものぞと思おもひ、問とハ我わが着きし  
小こ紋衣もんぎぬの餘あまりふて、縫ぬいし物ものぞと聞きハ尚なほ、りのとき  
奪うばひし賤布せんぷとそと、胸むねを冷ひやせる重兵衛じゆうべゑハ、心こゝろの裡うち



小念佛を唱て又も歎息し、噫其息子ハ俟とても  
所詮再び帰まじ一年以降便ふしとハ、確乎小所  
持の金財布結違ありし事なるべし、旅立日を命  
日小、吊慰遣が卻小、黄泉の供養小成ぬべしと憂  
小沈バ、姫おこつ、破と泣伏し、稍暫時、涙小むせて  
居たりし、漸く心を取直し、然バ、悴ハこの世小  
ハ、早あさき人の数ふりやと、問れて重兵衛、咳きし  
萬一無事、知ねども、先死者と譯めねと、云れて  
姫ハ、鼻打ちみ、自由ふあらバ、此身をバ、代り不遣  
て死もの、後不残て、今更不、死も死れば、憂苦勞

會も宿世の因果ぞと、嘆側小重兵衛ハ、首を低て  
當惑し、便小思ふ子不別れ、さそ悲くも、ちあらな  
く、思ふ其方の身の上を、不図き、たるも前の世  
の、何々の縁小あるあらん、今より後ハ、我々た小  
心を、おかり、居玉ひて、妻の世話をして、下され、其  
代小ハ、此重兵衛、文弥殿、不成更り、其方の世話を  
致し、べし、雇小未と思ハ、び小、我家とかも、ひ氣ま  
うせ不、暇の日、不ハ、寺參物見、遊山も、氣保養小、心  
の、隨々、往ね、しと、情を、含、真、実、の、言、語、小、老、の、眼  
も、胸も、曇り、勝、ある、哀、憐、さ、ハ、他、の、見、目、も、涕、なり、



姫ハ漸く目を拭ひ、慣染も浅き身不斯も深き、情  
の言の葉を娘が聞バ嬉くも、さぞ悦候せんこと  
小便の協おバ文弥不此事聞せおバ草葉のうげ  
でよろこむんと云不重兵衛打微笑、息子の  
の緯云バ涕の種とある、最早云いで譯りね、これ  
より我ハ其方をバ親とし思ひ世話せん不其方  
ハ妻を實の子と思ふて世話を頼あり、必しも身  
の末をあんじられおと怨不云バ、何うら何迄も  
世不在難き愛と、涕拭て重兵工を、神々佛と伏拜  
嬉し涕の止途なき年寄し身の惘然之、此時店の

旁隈なる、衝立除て悖然と起、欠伸をあら、巨露  
々々見廻し、悪心地好おして遣た、水一杯を玉ひ  
ねと、小厮小云つ、煙草をバ、くめらせ居バ漸く  
不、小厮ハ茶碗不水を入、出けを遅しと手を延し、  
偶と吞乾主不向ひ、勘定ハ何程をと、問バ重兵工  
點頭て、店の者不勘定させ、六百廿四文と云バ、彼  
者點頭然バその、釣銭疾々渡されよ、重兵工二朱  
り壹分りと、問バ彼者首を揮、否二朱や壹分の金  
不ハ非び、和殿不関し彼金と、云れて重兵衛胸打  
慄ぎ、関し金とハ何ありや、絶て覚ハありしこ



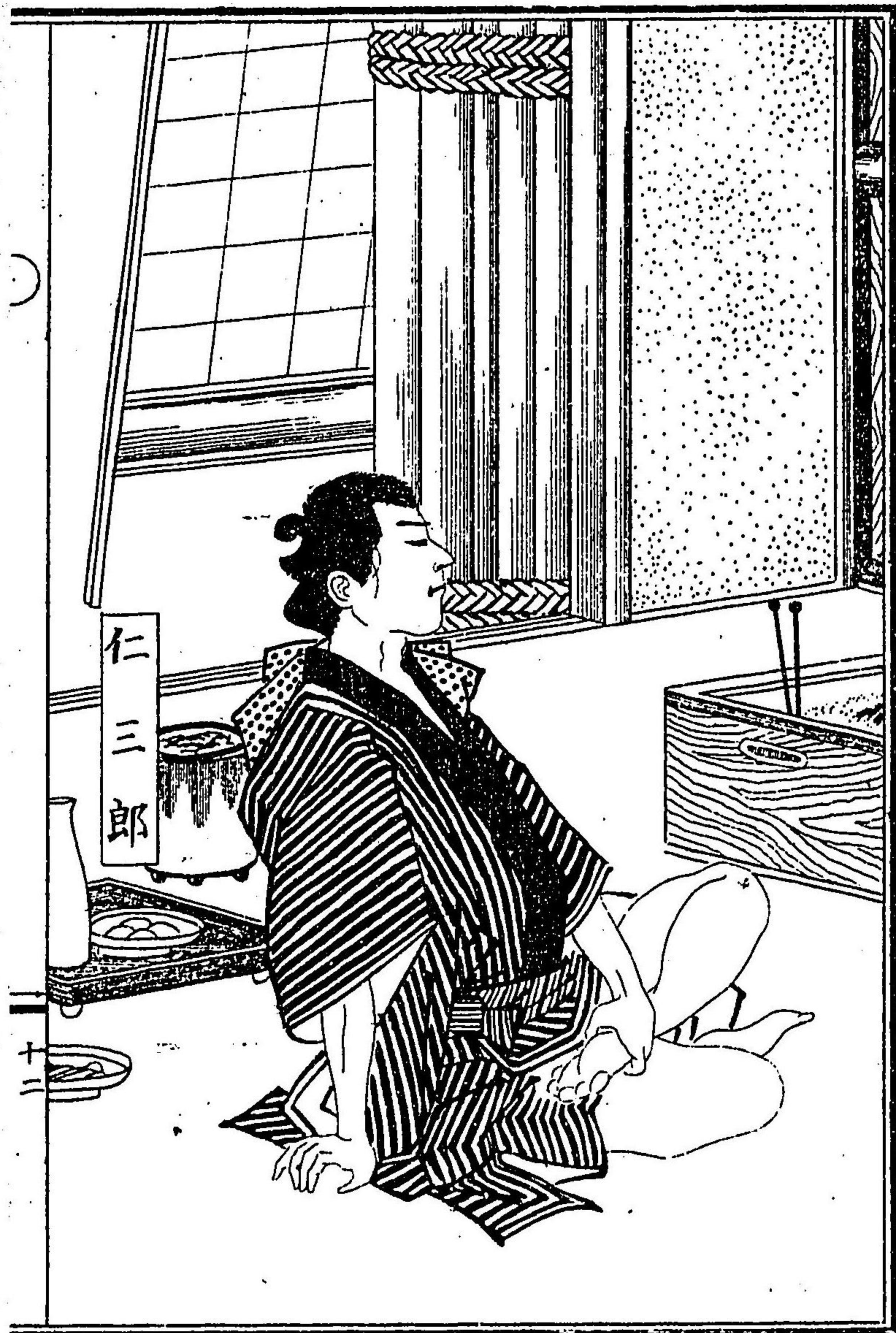
不審顔を彼者睜へ、何条覺のあきらんや豫て関し百兩の中で六百廿四文、差引残り九十九兩、九貫幾許の其金を、疾眼前で返されよ、夫も返さぬ縛ちらば、處置こそあれ如何ぞや、如何と敷圍罵れ、重兵工聞て胸屹然遁ぬ釘を宇都の谷の若や悪事を知りて斯脅迫者小や右も左も雇の姫を奥の間へ小厮云付誘ハセ、跡小重兵衛只一人篤と思案し度胸を定め、容儀改め其客を、側小招き問掛る、并ハ次小詳々あり

○仁兵衛重兵衛小再會し關小宇都の谷嶺

の悪事を詰る

禍ハ悪より来ると彼伊丹屋重兵衛ハ、一方からぬ罪悪を、複し斜の祟りより、妻ハ死靈の病不苦む、因て人手も入おれバ、雇を置んと桂庵小頼バ文弥が母おれバ、慮ぬ嘆を又重ね、臍を嚙より詮おき不、今又容不関たる、金を返せと迫られテハ、豫て為たる悪業を知や知ら何となく心燥けと重兵衛ハ、剛氣の胸を推鎮、彼客人を側へ招き寄つ、言葉を改め、酒の上りハ知ねども、見も未知ぬ和主より一品ありとも関し、覺もおき不、大







金関玉ふと云る、ハ、开も又如何なる緯あり、  
彼者聞て哂笑関し、所を忘しり、去年の九月鞠子  
小て簀捲不されて阿部川へ、打投る、を和殿の  
為不、命を拾ひし旅盗仁兵工を忘れ玉ふりと云  
れて重兵工熟と、顔を取て両膝を、碇と打つ、然  
バとよ、額の疵不其時の、面部変つて見忘しり、云  
れて見バ、覚ある、鞠子の宿で同じ家不泊し人  
ありけると云バ仁兵工膝を進め、和殿が此所不  
居やうとハ、知で今日しも朋友の、陪酩がてり一  
杯の酒不倒て御店の妨げ、不図眼が覺てきく声

ハ、覚のあれバ誰やうんと、見れバ尋る和殿とハ  
何所で廻り會も知れ、悪い緯ハ出来ぬものと云  
つ、家内を見廻して、三間々口の居酒店、思ふ小  
倍た立派不暮し、是をかり金を関しり、こゝろ安し  
と願をバ撫て、云バ重兵工最前より、二言目ハ  
我方不、関し金と云る、ハ、酒不與じて云る、ハ、  
心得難き緯ありと聞て仁兵工声荒げ开ハ又老  
耄しり、宇都の谷の、鶯の小路で好仕事、あか  
知ぬ顔付ハ、隻腹痛き緯ありと、星を指れて重兵  
衛ハ暫し憶せる容子、あれど、早速の遁辞、素知ぬ



顔好仕事を志つるハ、戯れ云り事小よれ、聞捨  
難き言係りと、威し掛れば、かうくと、仁兵衛ハ、咲  
ひ初めより、公ハ云ハ、和殿の不為と、隠て遣バ、知  
ぬ顔詳ハ云ハ、好聞ハ、藤屋を逐れ詮方なく、駅外  
の空戸ハ入り、轉て見れば、寝付れ、夜明を俟て  
居処へ通り掛し、二人連破し、仕事の埋草と、廻て  
見れば、和殿ハ座頭、這奴剥氣、と後より、尾て行  
し、不案の如く、情どうし、不嶺へ誘ひ、抜き遣て  
然も、百兩、駅倫も及かき、素人衆ハ、好度胸、か  
い、短い論ハ、無益折半、小して、五十兩、疾とく、揃て

出されよと、云れて、重兵衛怒の色思ひ、寄ぬ宛の  
云掛、聞り忌ハし、此身の濡衣、重複の悪口と、言急  
しく、教圍ど、仁兵衛ハ、尚も哂笑ひ、尤近知んと云  
る、おら、是見よりしと、懐より、宇都の谷で争ふ  
折奪し、紙の烟草入を、出して、是ぞ、慥ある、證據の  
品ハ、忘まじと、突着られ、重兵衛ハ、流石、愕く心  
を、まづめ、开ハ、世不在ふれし、烟草入、誰の品とも  
證據ハ、おしと、半ハ云せ、段口より、飛脚屋の受  
取出し、此書付ハ、京都より、江戸へ、手紙を、いたし  
たる、島屋の受取、其宛名ハ、伊丹屋、重兵衛様とあ



る、斯程正実な證據があれば、最早知ぬと云れま  
じ、重兵谷小因じ果煙草入ハ右も左も、その書付  
が有らうハ、我事おれど其品ハ、京より歸り小伊  
勢路ふて、落せし物と云バ仁兵工、其落したと云  
る、が、最早目闇の抜ぬ始り、幾許和殿が白を切  
ても、地藏の顔も一度二度、三度飛脚の此受取如  
何で知ぬと云はべき、後先揃をぬ言の綾夢々現  
り宇都の谷で、如何座頭を殺せばとて、人を盲  
目おしを仕方然も所ハ、葛の小路然も太い膽  
魂夜盗の上小人殺、生替りの煙草入、五十兩とハ

廉物黙て居てハ、緯分は否とら應とら挨拶され  
よ、此終素手おて歸るべき、斯成上ハ、悪事を訴へ  
がてら案内せん一所お来せ疾行ん、我身ハ無宿  
の喰迫もの、三間々口の居酒屋、三四人も雇を遣  
ふ、主と並で磔るなら死ても本望此二品を、證據  
お訴出るぞや、覚悟をせよと衝立揚れば、重兵工  
然バ、どうでも其二品を、證據お訴へいづる氣り、  
仁兵工見も知ぬ人ならバ、訴出れば、あらねども、  
よりこの宿で一命を助られたる恩あれば、内濟  
談おされるなら、殺した所為も我罪、五十兩ハ



二十でも、唯々と云の、東産、実ハ我も喰つめて、  
長く此地不居られぬ身九州地方の知音を尋寄、  
行んとまれど路用不困り、如何ハせんと思按の  
処、因に和殿不爰て會ひ、天の導き旅費を借と、指  
揮志玉小所不や、寐寤の悪き此二品、彼是云ねバ  
旅費の金借玉ひねと微笑バ、重兵工然バ一夜て  
も同舎の縁をもて、旅費のたのみを強面も、断ハ  
申さねど、突然手元不揃ぬと云せも、果は声荒げ、  
家の景光で物も云、二十兩や三十兩無とハ誰り  
実とせん、重兵工笑て、実商賈ハ、陽ハ困ぬ顔して

も陰でハ、簀を置慣習、二季五節句不困る時、神奈  
川なる伯父を頼、融通をせられバ、今和主旅へ出  
掛を幸ひ小、神奈川迄共侶不、行玉ハ、入用丈金  
を調参らせん、仁兵衛初て色を直し、并ハ和殿を  
累ハ、氣の毒ながら明日不ても、否幸ひ外不も  
用あれバ、今より直不支度してと、仁兵工を俟せ  
重兵工ハ、奥不入つ、病人を、姫不頼て支度調へ  
仁兵工を伴ひ神奈川を、指て二人ハ、扱ぎける  
○情不陥り、疾三小菊海晏寺不、死を謀る  
爰不文弥ガ、姉小菊ハ、彼深川の佐の松といふ、藝



妓家の抱こなり、辛き勤の座敷小酌を取さへ憂  
事と、思ふが中不重兵工の、弟彦三不図に思ひ  
思ハれ二世迄と、契る縁不しの因果どし、顔を合  
さぬ日とてなく、実や命を懸巻も、賢き性質の彦  
三も痴情を積ね焦れつ、通ひ究てハ卻不今で  
ハ主人も不首尾不て、店を逐れて兄方へ、引渡さ  
れて世話不ある、身の悵さハ思ふ俣不、通をれも  
せげ殊不亦、小菊の抱主も容子を知り、互の木為  
と意見を加へ、彦三が座敷と聞バかりく、不、小菊  
を放ちやりされバ、絶て會れぬ憂思ひ、採三絃も

手不着げ、とうなる罰り惆やと身の形なきを歎  
つ、一日千秋の心地して、暮れ内不彦三が何日  
情を寄し不や、月経さへ滞り、早三月ともなりぬ  
れバ、小菊ハ驚き飛立心持右やせん、左やと心を  
碎き、疾此緯を彦三不語り聞せて身の安穩計ん  
ものと思へども、逢瀬絶たる深川不渡る船さへ  
舵を絶亦二つ不ハ京橋の、仁兵工主が迎々不、身  
受せんとの相談も、辞術なき義理づくめ、否か客  
とハ思へども、世話不ある身の悲さハ、如何不せ  
んとも詮術なくと、獨り胸をバ痛ける、おししも







外屋の御座敷に容と八例の仁兵衛主急て仕度  
と迫立りれ進まぬ足も川竹の水不流のうき勤  
是非不及左裙とるさへ仇し男面不くしと心  
を痛つ、出て外屋の高樓へ行ハ仁兵衛をやく  
も小菊不向ひ能こそ我を愛て疾来て呉し嬉し  
さよ、今日ハ身受の商談ぞ喜ばれよや斯あらバ  
もをや我身の妻不あり、千歳の樂如何ぞや、开ハ  
思えバや喃小菊とふさぎ迫たる小菊が手を取  
て己が側不据情をうけて口説不ぞ小菊ハ悲さ  
弥倍て、思ひ飛退袂を控へ、此仁兵衛が斯計り不

情を懸て身受まで、あさんとまを喜び、若いと  
云ど勤の身愧がる、おも程のある幸ひ今日ハ吉  
日と艶よき返辞を疾してと、確乎と抱き放ねバ、  
小菊今さら殺しく、开ハ餘りの強緯あり、今疾返  
辞も出来ぬも、ま篤と、改明日おても、必だ返辞を  
致ん不、爰に放して玉ハれウし、否か人よと緩む  
手を脱て、旁不飛退バ、仁兵衛怒の顔を顕し、是程  
迄不思ひ寄、和女が辛き勤を憐れ、身價金を償て、  
樂をさせんと思ふ、我の顔踏付て、疾三とやら、何  
所の馬の骨とも知ぬ、青少年、義理立ける、情知



らぞめ義理知れ能く汝が主人を呼寄どよでも  
自由ふして呉んと一癖持たる顔色小菊ハ身  
も世もあられぬ心持然ど愛憎を尽かバ後の憂  
と胸撫下し良小言脱歸んと思ふ折うり此擾小  
外屋の主出末り腰を屈て只今陰小容子を伺ひ  
候へバ小菊が何う不調法致せし緯う何日小者  
き怒り玉ふぞ不審き然ハ右小左も僕小任して  
玉へと詫ける小道が仁兵卫も羞し氣小否因は  
も酌過し声高小成主の扱ひ善小任と後ぞどく  
小菊を瞋へ立行ける小菊ハ外屋の主小對ひ実

ハ無極くも身を任せ身受もるうら云々と一部  
首終を打語り斯手荒き客人小ハ最早出ま一と  
思へども常小呼る、身の辛さ樓主もうねて知  
る彦三主のあるうらハ、仇し男小身を任ひハ死  
とも何う致ひべき猜して程よく断りをして玉  
それと泣口説外屋の主始終を聞惘然小取あし  
彦三主も足近く末玉ひて我店のため小もあ  
し客人をれど容子をきけバ店も逐れて兄の世  
話小をることなれば金処うハ小づうひ小り困  
る程今ハ零落居酒屋の世話をして居る身小あ



れバ、何て其を便ふあらん、斯云バ女子の身、殊小物堅き生質も、一旦夫と契るうらハ、実小仇人ハ否、あらん、然ど金の世の中、ゆる金持客小ある、かれバ、云ガ隨身を任にガ、當時の慣習、兎も角も、和女が主小亦好高議、もるかれバ、こゝろ安く思れよと、云れて快らねど、柳小受て會叙しつ、八幡山の暮六つの大鼓と俱小打出しの、箱屋小送れ還り行爰小又彦三ハ、近頃小菊小逢ざれば、心変のしやせんら、今日ハ何して暮ぞや、如何もして今一回逢見んとハ思へども、ま、小あらざる浮

世の義理如何して、逢見んと、思按小暮て居たれども、先右も左も深川小、行て容子をきり、やと、頭巾小深く寒を凌ぎ、小菊が家の前小至り、容子を聞小誰も居ば、小菊獨ガ物の唄復習て居小仕合よしと、濱辺の割烹店の裏二階へ、上りてさらく一封の手簡認め、小厮小憑、小菊が許へ潜小贈る、小菊見さへ急がれて、時こそ宜れと飛来り、逢たりしと彦三小、取絶りて御心の、若や爰も志やせんら、仇小便の絶たるを恨つ泣つ一途小、彦三を憲ひ思ふ、心を千尋量りあく、好逢せてハ



玉ひしぞ、前まへ小ハ升屋まげで御身ごみ不逢あはひ別れともあ  
き曉あけつぎの、本意ほんいあき鐘かね不叩たたき出され以降そのちしてハ唯  
あらぬ、身みと成緯なりを只一言ひとこと御身ごみ不嘶なげし参まゐせて、身  
の計はかりひをせんものと思へど悲かなき便たすきへ、あらぬ  
浮身うきみの遣瀬やせなく、又詮またなきハ身受うけの商議しょうぎ何とし  
てう宜よろらんやと、嘆伏なげ小ぞ、疾しこ三も、共とも小かこちて  
小菊こぎくが脊せを撫なつ、我われも云々うんで、兄あにが家いへへ引取ひきとれ、  
姉あねが長ながの病床いとづ小、店とせさへ近頃ちかごろ忙いそぐ、容子ようしをきり人  
便たすりなく、思おもひ詫わつる効いありて、今宵こゝろ幾層いくそうの艱難うんなん  
で漸ちかく逢見あひし今いまの首尾くびびと、後あとや前まへなる譚わらわり、送こ小

声こゑを忍しのび哭暫なきし涙なみだ小暮くれたどり、綾あやおの錦織にしき紵すその、  
声こゑもかどろ小打曇うちり、一問ひとまの裡うちぞ滋しやうあり、疾い  
三さん小菊こぎくを慰なぐさめりね、思おも按おん小尽つぎて、居いたりしが、稍や有あり  
て頭うらを搥なぐ段々だんだん苦勞くろうも弥重いやね、道みちねバ早はや此上このうへハ、右みぎ  
も左ひだりても存あつて、添そる、由よしもあらされバ、覚悟かくごを究き  
め死しるより、他ほか小詮術せんぎゆあらぬゆゑ、一いつ段連退つぎのき未ま来  
ふて、かあらげ添そらんりたときと、こ、小猶豫うやうやをな  
まならバ、佐さのまじより追捕おつを掛かん、如何いかにぞや共とも  
侶とも小、一ひと先落まづん疾々とくと、急立せきられて喜よろこぶ小菊こぎく数かずあ  
らぬ身みを憐あはれ、共とも小死しで玉たまハラバ、実嬉まじくも有あり難がた



く、未未で見捨玉ふふと、流石名残の尽やらうで、又  
彦三不取継り、涕不哽ぶ折うら不次の間より衝  
一人、茲の坐敷不入来り、我抱の小菊をバ、青少年  
の彦三不連出されて堪るべき、斯ある緯と豫て  
より、知つ、留守不致せしハ、誤りから目不物見  
んと、敦圍猛く彦三が袷髮取て控へ伏拳を以て  
打擲せば、吁やと小菊ハ忙慌き、佐の松の主不絶  
り、挂へる所を蹴倒され、即転て號泣ぶ、彦三連不  
荒男が、拳固の下不許されよと、詫るを肯だ蹴つ  
踏つ、汝が為不小菊が身も、金不成をバ妨げられ、

憎しと罵り小菊が手を、辞を肯だ引捕れ、帰れハ  
跡不彦三ハ、千仞の玉を取れし心地、寂々我家不  
帰りける、小菊ハ手荒く佐の松の主不ひられ泣  
々も詫れど、諾ば宜くも我意見を肯だ脱いで、  
彦三と共不逃亡せんとハ、捨置難き体作悪き事  
ハ云ぬや、今より彦三と縁を切仁兵工の主不  
身を任せ、身受の談明日明後日、然ハ右も左も金  
のある、客不つくのガ流の身貧乏神の彦三不情  
を、尽くハ愚ぞや、心を決め、應えせよ、如何々々と  
問迫られ、小菊ハ涙不哽つ、情なき主の言と思











へど茲で辞ふバ、若彦三わが害もやあらんと、思ひ  
累かさねひ、然しかながら、今宵このよの旨こころ羨うらやまハ主あまが腹はらホ、あんどさ  
せおき何いづれとも、後日ごちゆう計はかふ術まがこそあれと、漸やく心こころ  
を取直とし、段々だんだん今いまの御意見ごいけん不なて、迷まよの夢ゆめハ覺さて候まゝ、  
最早もはや此この上うへ彦三ひこさう、一切いっけつ絶とて思おもふまじ、仁兵衛にべゑの主ぬし  
不な身を任まかせ、抱あや主うし大事だいじ不な勤つとめ侍さむらいれバ、只ただ此この緯いとハこの  
場ば限りりと、云いハ主あまハ完ま爾るり已やらひ、然しからバ必かならず思おも  
ひ断きり、身みの落おち付つきを計はかるこそ、肝かん要ようなれといへけ  
れバ、小菊こぎく倍ばい々々言ことばを巧たくく、実まこと彼容かのような貧びん乏がく、最早もはや  
懲ちやう果ぐ候まゝと、種々さまざま彦三ひこさうを罵ののれバ、主あまハ安堵あんどし怒いらりを収さめ

其夜そのよハ緯いとなく済す不なける、扱あも彦三ひこさうハ寢やすく不な、小菊こぎく  
小會あひそま即すなはち、連つて処ぢんとせし折ま、佐さの松まつの主あま不な見み  
答こためられ、酷いたく擲なれ、漸や々々と道みちれ出いれど小菊こぎくが  
身み心こころ元もとなく如何いかぞや、容よう子を聞きんと翌あくる晚ばん深川ふかがわへ  
と迎むかひ行い、小菊こぎくが家いへの裏うら口ぐちへ廻まて、暫しばし燈とう籠ろうの、影かげ  
不な忍しのびて窺うかがふ不な、誰たれとハ知しば裏うら口ぐちを、密ひそか不なあけて  
忍しのび出いで、女おんなの姿すがたハ正ただ不な、小菊こぎく近ちか付づ、不な現あられ出いで、  
开ひらハ小菊こぎく、彦三ひこさうぞと、潜ひそか声こゑを掛かけられバ、彦三ひこさう主あま  
宜よろく来きと、喜よろこぶ小菊こぎくを制せいし禁とめ、言い合あせねど好よ機き  
會あひと、談わひ話わり胸むねの裡うち送たく不な顔かほを見み會あひて、一ひと先まづ茲こゝを



と手不掌を取て、足を早めて裏路を、西へ急て  
や芝を、打過回顧伏拜、受し御恩ハ高掄や、酬も  
やうで一人七兄一人ハ母を跡不して往も本意  
なき二人連先立罪ハ左なきだハ、重か上の更夜  
嵐波音高き鈴が森岩不急る、死出の旅淵小や  
入ん縊んと人目を包む頬被り、深き因縁の品川  
ハ、無常を告る初夜の鐘不回疾三ハ心付今鳴鐘  
ハ海晏寺是ぞ代々頼寺幸ひ彼所不赴きて、最期  
を遂んと急行頓て座を占稱名唱へ、頼ハ二世の  
誓ぞと、既不斯よと見えし折一陣の陰風飒と吹

て陰火忽然と燃上り、悪やと二人ハ驚くハ文弥  
ガ姿朦朧と、現れ出て疾三ガ刀不せがり禁むる  
ハ二人ハ怖れ怪て扱ハ旅路で人手不掛り、一念  
茲不容れて、二人ガ死るを禁るりと、夢の心持不  
范然と、現不戌ハ文弥の声不、死ハ不覺ぞ二人と  
ハ疾彼方へ立越玉へ、自然奇遇の僥倖あらん、別  
て頼ハ我母の孝養ありと云終り、姿ハ消て寂然  
と、梢不風の音のこかり、浩所ハ年闌し、一人の姫  
喘来つ、雲洩月ハ二人を視て、驚訝り、イしが、小菊  
ハ人の足音不、顔見られじと袖を掩ひ、密不見れ



バ我母不、破と泣つ、立場り、喃母上りかきく  
と、送不涕塞あえば、小菊ハ漸く疾三と、己りおき  
中と成しより、佐の松を逃出て、共不死んとせし  
折不、弟文弥が幻不、頭れ禁し事追り、斯云々と語  
るを聞て、母ハ辱歎息し、我身ハ今日しも伊丹屋  
へ、雇れ末る折柄も、店不酔卧居る客の、云々不  
て主不云言の端緒いと怪く、思ふもめりう潜不  
きけば、宇都の谷とやう小座頭を殺し、金を取し  
と強談しが、主ハ終不その客と、共不神奈川へゆ  
く跡不、尚も容不、搜聞不、妻の病も二年越、夜毎

不盲人の怨霊不、襲れ苦む由ありと、店の小厮の  
叫く不、初主が情の言夫是思ひ察をる不、文弥を  
殺し官金を奪ひ取しハ重兵工と、思へば無念遣  
方なく、然ど手剛き重兵工を、老の腕不討得んハ、  
及ぬこと、ハ思へども、一刀かりと怨を報し同  
じ及不、死るをうせめて、此世の思ひ出と、即跡を  
追たれど、影さへ見えぬ宵闇不、昇る月さへ雲蓋  
て、夫は是りと、迎る身も、足弱車如何せん、思ハば  
茲で、巡り會娘の死限是も又、文弥が導く所不や、  
誘共侶不、敵を討、文弥が怨を晴さんと、焦立側不



頭を低茨三連り不嘆息し今ハ何を鞆はべき  
其重兵工ハ実の兄如何なる天魔の附し不也斯  
浅間しき兄上の心ハなどて乱しぞ悲くも又愧  
しく只此上の願不ハ此疾三を討取て文弥の靈  
不手向られ恨を晴し玉ひねと覚悟の体不小菊  
ハ縫りよと泣つ共侶不死んと誓ひ茲へ来  
て縦ひ敵の弟と分ればとて我身をまて兄  
不代て死るとハ難面事の恨しき我身ハ家を逃  
亡し再び復る道もなき我身代りて死程不御身  
ハ残て母上を恤き孝養願ふぞと送不生死を争

ふ不母ハ屢嘆息しやよ二人とも俟ねりし二年  
以降文弥が行末訊る效もかりく不きて弥倍  
悵の遣方なき不敵をバ討んと茲迄来りし不囚  
に娘不會のこり、鞆疾三殿も居ませしハひと  
方からぬ力不と頼效なき敵の弟討も討るも親  
同胞是愈宿世の因縁なれば今更何を怪まん今  
霄ハ宿を何地不り、需て篤と高議バ他不為べき  
術もあらんと三人打列立去けり  
○重兵衛仁兵工を殺し百金旧不復して自  
殺ひ



然バ伊丹屋重兵衛ハ、仁兵衛を連れて急ぎ足、廿日の月の海高く昇し頃、小鈴が森神奈川とハ偽小下、豫て思ふ由有バ、悪事を知たる仁兵衛をバ、茲不て殺んと、計し緯故仁兵衛を賺し、何氣無管待、打談へバ仁兵衛も又心緩して、自負顔、淫言不似れと日頃より思ひ染たる深川の佐の松の抱藝妓、小菊、小風と心を懸是、迫随分荒稼、取し金を継込ど、浮営業不珍敷、何時も行ハ大尽容不、作て情を尽共、唯一回も云緯を肯由ハ此奴虫こそ有と、搜て見レバ彦三と、云ける男とい一約し、深

い中だと聞ければ、和殿、金を借受て、逃隠れせぬ、其前不、身受をなして彦三の、鼻を空して遣度者、其上心不、従ハバハ、娼妓不販て腹ををし、前不ハ旅費と頼とも、実ハ小菊を身受せんと、思ふてありと話ふ不、重兵衛心不、憤り、我弟の盟約ハ、小菊を身受恣不、慰まんとして我を強談、不、くき奴と怒る色笑ひ不、隠し尚解て、語り賺しつ仁兵衛をバ、二三歩遣過し、拔手も見バ、切付しが、仁兵衛も不、敵のちれ者、おれハ、心得たりと、引放し、傘不て刀を撃落し、追つ捲つ闘ひしが、つい小重兵衛仁







兵卫をバ、斬斃して大息、死骸不対ひ掌をあハ  
せ、惘然あがりも我悪を、知たる汝の不運さよ、我  
義不杖て文弥を殺し、其金不て古主の難を、救へ  
バ望も既不遂然バ、其金又調へ、文弥が親属不尋  
遇ひ、讐と名乗て討れんと、思へど其金未と出未  
び、然を若汝より、事発覚て公の罪不處せらるそ  
の時ハ、金も返さび仇も討せ代、文弥不誓ひし言  
もた、び、嘆ハしと小神奈川と、欺き茲で殺せし  
かり、頓て冥途不赴て、云訳せんと稱名唱へ、兩三  
步行ける折、三人連立未掛りしガ、一人俄不声を

掛夫ある人ハ兄上りと、問れて重兵卫立駐り、开  
ハ彦三りと驚て、三人の容子を訝り問バ、彦三云  
々斯々と、事の顛末漏りなく、語不重兵卫嗟嘆し  
つ、今茲不て三人不會も、是亦不測の因縁ぞ、実古  
主の大事不杖云々不て、文弥を殺所持の官金奪  
ひ取老たる母不嘆を懸現悲くも恨しく、我肉を  
生あがら、食ふも尽ぬ憤り、誘討とつてをらされ  
よ、弟も共不助太刀せよ、早疾々と焦立折傍の木  
間不忽然と、声を掛つ、見れ来る、一人の武士ハ  
別人をらび、重兵卫が古主尾花戈三郎なり、始終



の容子ハ那方にて、具不聞て重兵工ガ、忠義不感  
涙禁らぬ、抑重兵工の苦心にて、再び開く尾花の  
家寶器を復し本領へ、今日しも帰参の并領不、金  
百兩を賜りし、喜告て此金を、疾返さんと家不  
到レバ、神奈川迄往しとハ、定て金の入用と、思へバ  
即跡を追茲へ来レバ人殺し、意恨の仇ヲ將と金  
を奪ふ賊ヲと那方ある樹間不潜ミ窺バ、豈た  
らん重兵工ガ仁兵工殺レ緯なりとハ、驚く内不  
三人も茲不、来るとハ不測の因縁あり、先々借た  
る百兩を、只今返せば受取ねと、出れを重兵工推

戴キ是ハ小菊の身價金則ち返し申はあり、是不  
て身受を致しなバ、些ハ望も惚んと、母へ適與バ  
尾花弋三郎又重兵工不、打向ひ、汝ガ是迄作レ悪  
事、其源ハ我家不、尽レ忠義の余りより止を獲ざ  
るの所為にて、実恤むハ文弥の死、我家永々あり  
ん限り、追善供養致せし、又喜ガハ妻ハ賤前不  
来りて容子を見レバ、二年以来何日不、おき、心持  
快とて目せへ見へ翌日ハ髪をも解さんと、いと  
元氣も爽也、忽ちや全治疑ひあし、重兵工大ひ  
不よろこびつ、开ハまたこの世不、何ひとつ、思



ひかくこと絶てなし、疾々我を討とつて、文弥が  
霊不手向よと、勇と焦立側不、弟ハきらかり母小  
ぎく、夢の心持不茫然と、袖不涙を絞るの、鬼角  
の應へもせざりしりバ、詮方なくや重兵工ハ、我  
と吾腹不刀を刺文弥を殺せし罪科ハ、是不て許  
し、訊よと、云つ、右手不引廻せば、驚き悲しむ彦  
藏小菊母も、今更恨も解悪やと、縋り悲して、今ハ  
御身を何とりせん、やよ俣玉へと禁る不、尾花戈  
三郎頻り不感嘆し、天晴健氣を生害ぞや、是不て  
雙方意恨なし、文弥を初め人々の、菩提の為不ハ

お賤どの、墨の衣小姿を更尼とかりて、一生涯佛  
小仕へ吊ハせん、小ぎくハ今より此金で、身受を  
かして彦三と、我媒始して夫婦となし、もとの主  
人白木屋の家督をつきて、悟らば母へ孝養尽以  
し、母ハ娘の立身小、怨をもちし文弥が後を長  
く吊ひ老の身を、心安く送るべしと、残る方なき  
計ひ不、重兵工いと悦びて、空小残る有明の月  
の光と共侶不、空く呼吸ハ絶小ける、倉嘆き憫  
て、家小伴ひ怨不、海晏寺へ葬りける、妻のち賤ハ  
その日より、髪を卸して尼とあり、夫の菩提文弥



ケ跡いと堅固小予ふたり又尾花戈三郎ハ彦三  
小菊を更て夫婦とあして白木屋の家督相續緯  
あく計ひ母のかりつ小孝行尽し家業益繁昌し  
治まる世こそめでたうりけれ

文孫 宇都谷峠峯の夜嵐後篇終

明治十六年六月二十五日御届  
阿 年十一月十九日出版

定價拾五錢

編輯人

日本橋區濱町二丁目十二番地  
上村秀昇

出版人

京橋區弓町十二番地  
丸山幸次郎

發兌人

日本橋區濱町二丁目十二番地  
高崎脩助



賣

棚

人

井上勝五郎

神原友吉

大西庄之助

法木徳兵衛

深川屋金之助

攝陽堂



